

市民協働による竹細工道具資料の整理活用について

山本 菜摘

はじめに

当館で令和4年(2022)11月1日(火)から令和5年(2023)1月15日(日)まで行われた企画展「ようこそ!竹細工ワールドへ!!~久保沢最後の籠屋さん~」には、実日数56日の間に12,957人の観覧者が訪れた。これは会期中の総入館者数19,554人に対して66.2%の割合であった。昔の暮らしを紹介する「学習資料展 昔の小学生—昭和30~40年代の子どもたちの世界—」と同時開催であったため、相乗効果もあったと思われる。

この企画展の契機となったのは、当館が令和2年(2020)に、相模原市緑区久保沢で平成3年(1991)まで竹細工職人(籠屋)として活躍していた宇佐美幸治氏の竹細工道具一式の寄贈を受けたことである(注1)。

これらの資料については、民俗資料の整理ボランティアグループ「福の会」が継続的に資料整理に当たった。企画展はその成果を展示しており、市民協働事業として位置づけられる。

本稿では、企画展「ようこそ!竹細工ワールドへ!!~久保沢最後の籠屋さん~」の準備から開催までに至る福の会の活動を報告することで、博物館における市民協働の具体的な成果を紹介したい。

1. 福の会

「福の会」は、有形の民俗・生活資料の整理を行うことを目的として、平成24年(2012)の秋に活動を開始した。

結成の契機は、南区下溝の福田家の蔵の中の資料が寄贈されたことである。福田家は小田原北条氏の家臣とされる旧家で、蔵は明治30年(1897)に造られたものであった。その福田家の「福」と幸福の「福」の意味を込めて、会の名称は「福の会」とされた。基本的に第一・第三木曜日を活動日としている。

最初の活動となった福田家の蔵の整理では、蔵からの資料の運び出しに始まり、洗浄、燻蒸、計測、写真撮影、資料カード作成、資料番号注記など、博物館に資料として収蔵されるまでの一連の作業を2年かけて行った。

これと同時に、新たに博物館に寄贈される資料があればその資料整理も同様に行った。

このような活動の成果を活かし、翌年の平成25年(2013)5月25日(土)~6月30日(日)には、収蔵品展「蔵の中の世界・福田家資料紹介~市民の力で博物館資料へ~」を開催した。展示に際しては資料の選定からレイアウト、実際の展示作業、会期中の展示解説まで福の会会員自身で行い、市民がこのような活動を広く知ってもらえるよい機会となった(小澤・加藤 2014)。

また、平成26年(2014)5月24日(土)~6月29日(日)にも2回目の収蔵資料展「蔵の中の世界②~市民の力で博物館資料へ~」を行ったり(小澤・加藤 2015)、平成27年(2015)の博物館開館20周年記念展「こんなモノが集まりました—博物館20年の歩み—」においては、子どもの晴れ着や大正時代の霊柩車の展示作業などを手掛けたりもした。

その上、津久井郷土資料館の閉館に伴い、博物館に移動した民俗資料を収蔵庫内の棚に配架し、どの棚にどの資料を置いたのか確認と記録化という重要な作業を行った。このことから、当館にとって福の会の存在は、なくてはならないものとなっているのがわかるだろう。

近年では、南区当麻や緑区長竹の講中道具の資料整理を行い、令和3年(2021)10月30日(土)~令和4年(2022)1月10日(月・祝)に開催された「学習資料展 道具が変えるわたしの暮らし~過去から未来へ向かう記憶2~」では、「家での婚礼」のジオラマの制作に一役買った。

上記のような活動の中で、後述する宇佐美幸治氏の竹細工道具一式の資料整理も行われたのである。

2. 相模原市緑区久保沢と籠屋

かつて久保沢は津久井地域の丹沢山地と相模野台地の産物を交易する市場集落として栄えた。江戸時代に宿場となり、六斎市が開かれていたという。

大正時代、久保沢には竹細工職人である「籠屋」が6軒も存在した。この籠屋の多さは、竹細工が地域の生業と密接な結びつきがあり、多くの需要があったことと関係している。

相模原市で盛んに行われた養蚕では、桑摘み籠やエガといった竹細工が必須だった(注2)。畑作でも、籠、ザ

ル、フルイなどは重要な農具である。こうしたことから、籠屋は地域の生業を支える極めて重要な役目を担っていたことがわかる。

しかし、昭和40年代に入ると、久保沢に6軒あった籠屋は1軒になってしまう。その最後の籠屋が宇佐美幸治氏である。

宇佐美氏は、明治34年(1901)3月22日に神奈川県津久井郡川尻村久保沢(現在の緑区久保沢)で生まれ、平成3年(1991)6月11日に逝去された。

大正4年(1915)に14歳で久保沢の籠屋に奉公に上がり、竹細工の修行に入った宇佐美氏は、その後独立して職人の道を歩む。非常に多才な人物で、竹細工だけではなく、料理や芸事など様々な局面で活躍し、特に造園関係の庭仕事では、植木職人として兼業するほどの腕前であったという。

3. 資料整理と聞き書き調査

(1) 資料整理

令和2年(2020)に寄贈された宇佐美幸治氏の竹細工道具一式は、釘や杵など細かいものを含めると、およそ1,960点にも及んだ。これらに対し、福の会はこれまで通り、洗浄、燻蒸、計測、写真撮影、資料カード作成、資料番号注記など一連の作業を行った。この作業は、令和2年(2020)11月に始まり、令和4年(2022)1月に完了した。

資料整理を進めていると、寄贈品の中には用途不明なものが幾つか見受けられた。しかし、既に宇佐美幸治氏は他界されているため、本人への確認は不可能である。そこで、後述するように宇佐美幸治氏の孫である宇佐美泰氏に聞き書き調査を行うことで、足りない情報を補うことができた。

(2) 聞き書き調査

今回の資料整理と企画展の準備のため、福の会では聞き書き調査も実施した。

宇佐美幸治氏の孫である宇佐美泰氏への聞き書きは、令和2年(2020)9月17日(木)と令和4年(2022)6月16日(木)の2度行われた。この調査には筆者も同席している。

以下ではその調査を基に、生前の宇佐美幸治氏について紹介しよう。

まず、久保沢においての宇佐美家は、宇佐美幸治氏から始まったという。宇佐美氏の父に当たる人物は、伊豆の宇佐美の出ではないかとのことで、泰氏が調べてみた結果、小田原には宇佐美姓が多いことがわかったそうだ。

宇佐美氏の父の兄が、久保沢で運送業をしており、その関係から久保沢に来たと推察される。宇佐美氏の母は代々久保沢に住んでいる人であったらしい。二人は久保沢で知り合い、結婚したという。その後、宇佐美氏の父は菓子の行商で三浦半島の方へ行っており、そこで新しく所帯を持ったらしく、そのまま三浦に住み着いたという話だった。

前述の通り、宇佐美氏は14歳で久保沢の籠屋に奉公に上がった。宇佐美氏が奉公に上がったのは、手に技術をつけて収入を得るためであったという。20歳前後まで修行した後に独立し、死ぬまで籠屋を続けていた。独立後も、宇佐美氏は親方とは連絡を取り合っていたようだ。また、自身も弟子もとった。その弟子も独立して中野に移ったらしい。

昭和20年(1945)頃、44歳で招集され、熊本の部隊に入隊した。宇佐美氏は17歳の長男に家業を託して、妻と6人の子供を残して出征した。部隊では任務として、一日に1個かごを作ることを命じられていたという。そして、そのまま熊本の部隊で終戦を迎えることになる。泰氏によれば、「長崎に原爆が投下された時は、大きな音がした」と語っていたそうだ。もちろん、その大きな音が原爆だと知ったのは、あとからだっただが……。

さて、もう少し詳しく籠屋としての宇佐美氏について見ていくことにしよう。

竹細工の材料となる竹は、近所に何か所かお願いしていた場所があり、そこで調達した。竹は、3年に1回くらいの頻度でまとめて取っていたという。

作業はほとんど屋内である。35年程前に家を建て替えたが、その前までは家の中に作業場があった。切った竹の保管場所は、作業場と一段高い茶の間の間にある隙間であった。竹細工を作る過程には数日水をつけておく作業があるが、それについては用水池があったという。

泰氏の話では、久保沢で何軒も籠屋があった頃、それぞれの籠屋には縄張りや得意分野などはなかったそうだ。また、籠屋同士の寄合のようなものもなかったらしい。少なくとも、泰氏は聞いたことがなかったという。宇佐美氏は、他の籠屋とは立ち話する程度であった。寄合がなかったため、同業者で集まって商品の値段を決めるような機会はなかったが、恐らくは互いに相談していたのではないかと推察される。

仕事の注文については、多くが人とのつながりによってもたらされたのではないかと推測できる。宇佐美氏は城山町の衛生委員を務めていて、家々の緑の下の消毒などもしていたそうだから、こうした地域とのつながりが仕事の依頼にも影響していたのかもしれない。

宇佐美氏は注文があれば何でも作った。例えば、相模川の河川工事の際のジャカゴ（蛇籠）や養蚕で使用するエガ、肥料やゴミなどを運ぶコイミ（肥箕）などが挙げられる。

竹を薄くすることを「へぐ」といい、へいだものを「へね」という。宇佐美氏は「「へね」の厚みは指で挟んで知るもので、「へね」の厚みが均等でなければ職人ではない」といつていたそうだ。

プラスチックが普及すると、注文は減った。宇佐美氏の長男は昭和中期に廃業し、会社勤めとなった。

晩年に仕事量が減ってきた際、宇佐美氏は「(指や手に)棘がささりやすくなった」といつていたそうだ。これは仕事が少なくなると、指や手の皮が薄くなるからである。最後の頃は幼稚園の籠神輿や小学校の運動会で使用する球入れの籠などを作っていたという。

泰氏からは宇佐美氏の信仰についてもお話を伺うことができた。それによれば、毎月1日と15日には、川尻八幡へのお参りは欠かさなかったそうだ。川尻八幡の囃子にも参加していて、踊りの大師匠であった。

祭りの準備は例年7月の初め頃から始まるが、宇佐美氏は熱心に参加していた。早い時には6月中旬から準備が始まることもあったそうだ。家には囃子連の人々が練習に来ることもあったが、その時は仕事を中断して、よく教えていたという。

また、善光寺の奉賀団の世話役（役員）もやっていたそうだ。

この他にも、興味深い話がある。宇佐美氏は1980年頃まで「六三除け」をやっていたというのだ。六三除けとは、原因不明の痛みや病院で診察しても効果が見られない場合に行う厄除けである（注3）。宇佐美氏は近所の人々から「体の痛いところを治してほしい」などの依頼を受け、神棚に向かい、灯明をあげて、何日も拜んでいた。しばらくたって、痛みが治った人が「おかげでよくなった」とお礼に訪れてきたという。「かごやのじいさんはよく当たる」といわれていたそうだから、近所では評判だったのだろう。

こうした信仰を通した人付き合いもまた、宇佐美氏の交際範囲を広げ、籠屋の注文にもつながったのではないだろうか。

宇佐美氏が亡くなった時、ご遺体の胸には鉈を置き、祭り半纏をかけたそうだ。宇佐美氏の身長は155cmくらい、体重は45kgくらいで、小柄だったといえる。しかし、骨太だったため、亡くなった時の骨壺は「大」を用意したのだが、それでも全部は収まり切らなかったという。

令和4年6月16日（木）の聞き書き調査では、寄贈い

ただいた資料についてもお話を伺った。資料カードのコピーをご覧いただき、竹細工道具の具体的な使用方法や宇佐美氏がどのように竹細工を作っていたのかを教えていただいた。これによって新たな知見を得られただけでなく、資料名の訂正も行うことができた。

例えば、それまで「カゴ」としていたものが、実は酒まんじゅうを入れるための「まんじゅうざる」であることをご教示いただいた。この際、別の資料かと思っていたものが、「まんじゅうざる」の蓋であることも判明し、資料カードを訂正した。同様に、単に「ザル」としていたものは、ゆで上がったそばを鍋から上げるのに使用した「そばあげ」であることがわかり、細かな用途によって、様々な竹細工が使われていたことを改めて知ることができた。

もう一つの聞き書き調査は、横浜市で現在も営業している柳田竹細工店に対して行った。実施日は、令和4年12月1日である。相模原市内で籠屋を営んでいる方を確認することができなかったため、同じ神奈川県内にある柳田竹細工店に協力を依頼したのだ。

柳田竹細工店では、竹細工店の現状などを伺った。この調査は展示に反映させることができなかったが、展示解説に活かすことができた。柳田竹細工店で販売されている商品を購入した福の会メンバーもいて、改めて竹細工のすばらしさを実感することができた調査であった。

なお、柳田竹細工店には、事前に、ホームページに掲載されている竹ひごを作る工程や籠を編んでいく様子を撮影した動画を企画展で上映する許可をいただいております。そのお礼と報告もすることができました。

4. 企画展の準備

令和4年（2022）6月16日（木）に行われた話し合いで、秋の展示は、宇佐美家から寄贈された竹細工道具一式を活用して展示することが決まった。この時、竹細工道具一式だけではなく、当館の収蔵資料である竹細工についても併せて展示することが検討された。展示期間中は同じ特別展示室で学習資料展が開催される予定であるため、会場の手前側半分を使用することとなった。

展示に関しては、福の会メンバーから活発な提案がなされた。例えば、資料の選定については「竹細工の製作過程を示す資料があるので展示してはどうか」や「熊手を作る道具があるので、それを活かさないか」という意見が出た。

また、レイアウトに関しても「完成されている竹細工の後に、竹細工道具一式を紹介してはどうか」や「竹細工は露出展示するのか、ウォールケースに入れるのか。

ウォールケースに入れる場合、動線を工夫する必要があるのではないか」といった具体的な提案がなされた。

それから、竹細工そのものについては「農具、漁具、年中行事など、竹細工を用途別に紹介してはどうか」や「組む、編むなど、竹細工を加工の方法から紹介してはどうか」といった展示方法についての提案から、「竹で作られたものが、現在ではどうなっているのか、その変化を見る必要があるのではないか」という時代的な変遷を意識した意見も挙げられた。

このような話し合いはその後も継続して続けられたが、展示構成を考える上で重要な鍵となったのは、寄贈された資料の中にあつた「かご帳」だ。

かご帳は、昭和23年(1948)から昭和63年(1988)年までに宇佐美幸治氏が受けた注文が記されたノートである。これには、依頼された年月日、依頼者名、製品名とその寸法などが記載されている。従って、かご帳を見ることで、宇佐美氏が晩年に受けた仕事の内容を知ることが可能となる。

かご帳の内容をリスト化し、年代順や注文品の種類別に分類した結果、興味深いことが判明した(表1)。まず、宇佐美氏の最晩年の仕事の依頼主の多くは、学校であったということだ。前述した通り、孫の宇佐美泰氏の聞き書きでも、幼稚園の籠神輿や小学校の運動会で使用する球入れの籠を作っていたことは聞いていたが、かご帳によって客観的にもそれを知ることができた。宇佐美氏は球入れの籠の他、運動会で使う大玉やだるまなども作っていた。

また、晩年の依頼の多くは新たに製品を作るのではなく、専ら修理であったことも明らかになった。

こうして時代ごとの宇佐美氏の仕事の内容を知ること、それを展示構成に反映させることができるようになった。

7月21日(木)からは具体的に展示資料の検討に入り、8月には企画展のポスターやチラシで使用する写真撮影を行った。そして、10月6日(木)には展示資料が確定した。その後、会場で流す映像の選定、展示台の用意、展示するだるまの補修など着々と準備を進めてきた。

念のために記しておくが、福の会ではこの間も企画展の準備だけをしていたのではなく、他の寄贈品の資料整理や博物館実習の大学生に対する対応なども並行してこなしていた。

会場の設営も、福の会のメンバーが自ら行った。資料を陳列するだけではなく、竹細工の美しさにも注目してもらえるよう、照明を調節し、影が美しく出るようにするなど展示方法を工夫した。さらに、室内に置くベンチ

を竹製品にして、実際に竹細工に座れるようにした。

こうして準備が整い、無事に企画展の開催となった。

5. 企画展

次に、実際の展示の様子を見ていくことにする。

企画展「ようこそ！竹細工ワールドへ！！～久保沢最後の籠屋さん～」の実際の展示構成は以下の通りである。

・プロローグ 福の会の活動

福の会の活動について紹介する。

・1章 暮らしの中の竹細工

暮らしの中にある様々な竹細工について紹介し、昔から竹は身近なものであることを示す。ここでは大きく、「生業」と「日常生活」というくくりで分けて紹介する。

・2章 籠屋の仕事

籠の製作過程など、籠屋の仕事について紹介する。

・3章 久保沢最後の籠屋 宇佐美幸治さんのこと

大正時代には6軒あつた久保沢の籠屋は昭和3、40年代には1軒になった。その最後の籠屋であつた宇佐美幸治氏の晩年の仕事(戦後～)を、仕事道具と共に紹介する。

表2は展示資料の目録である。

1章で養蚕や畑作が生業の中心であつた頃の民具を使用の順番に紹介し、3章で福の会の整理した資料を活用して、戦後の宇佐美氏の仕事を紹介する流れとした。そのため、展示全体を通して、籠屋という職業と竹細工の全盛期から終焉までの歴史を概観する内容となつていた。

これと同時に、竹細工は生業と深い関りがあつたことから、展示を通して市内の生業の変化についても把握できる構成とした。これによって生業の変化と竹細工の盛衰が密接に関係していることを来観者に理解してもらえよう努めた。

会期中の関連イベントとして、展示解説も行われた。講師は担当学芸員である筆者と前民俗担当学芸員、福の会、宇佐美泰氏である。展示解説は、11月13日(日)と12月11日(日)の2度行われ、1度目が20人、2度目が40人の参加者であつた。

来館者のアンケート結果を見ると、記入者は6～8歳が多かつた。これは同時開催していた学習資料展が小中学生に向けた展示であつた影響であると考えられる。また、市内中央区在住の来館者が多く、市外では神奈川県在住者が多かつた。

具体的な感想としては、「実物の竹かごやビデオでの竹細工の作り方が見られてよい」や「実演や実際に体験を

したい」という意見が目立った。

展示終了後も市民から竹細工に関する問い合わせが多く、本企画展への関心の深さが窺えた。

おわりに

今回の企画展では、資料の寄贈者である宇佐美泰氏や福の会のメンバーに、身近にあったものや整理したものが、調査研究を経て、キュレーションすることで、相模原市の歴史文化を語る「資料」となり得ることを改めて示すことができ、市立博物館としての当館の意義を伝えることができた。

それと同時に、今回の企画展では新たな試みも行うことができた。

これまで福の会の行ってきた展示は、「蔵の中の世界・福田家資料紹介～市民の力で博物館資料へ～」や「蔵の中の世界②～市民の力で博物館資料へ～」のように、寄贈された資料がメインとなっていた。しかし、今回は寄贈された竹細工道具一式だけではなく、既に博物館が収蔵していた竹細工の資料も使用した。これによって、互いの資料を相互補完することができた。

この点をもう少し詳しく説明しよう。寄贈された資料は、戦後の宇佐美幸治氏の仕事に関するものだけであった。従って、それ以前の市内の竹細工については、寄贈資料だけでは知ることはできなかつたのである。

しかし、館内の収蔵資料を使うことで、市内における竹細工の歴史をさらにさかのぼることが可能となり、養蚕や畑作において竹細工の果たした役割を伝えることに成功した。このような資料の相互補完によって、寄贈された竹細工道具一式にも付加価値をつけられたのではないかと考えている。

今後も福の会の活動を発展させていきたいと思っているが、展示の際には単に寄贈資料のお披露目ではなく、今回のように収蔵資料全体の中に寄贈資料を位置付け、その資料が地域でどのような役割を担っていたのかを伝えていきたい。

注

- (1) 籠や箕を作る職人が籠屋である（城山町 1988）。
- (2) エガは蚕を飼うための籠である。この上に蚕座紙を敷き、網をかけて、蚕を育てる。エビラともいう。
- (3) 一般的な六三除けは、数え年の年齢を9で割り、残った数によって病の身体部位を知るというもの。

参考文献

宇佐美泰『久保澤雛子探訪』弘報印刷株式会社出版センタ

ー 2022

小澤葉菜・加藤隆志「相模原市南区下溝の福田家の来歴とその蔵などについて 付 下溝地区・福田家の蔵収蔵資料の整理について～市民協働による資料整理の試み～」『相模原市立博物館研究報告』第21集 2013

小澤葉菜・福の会／加藤隆志・水曜会「市民の会」による展示の記録～「福の会」及び「水曜会」の平成25年度収蔵品展～」『相模原市立博物館研究報告』第22集 2014

小澤葉菜／加藤隆志「福の会」の活動について『相模原市立博物館研究報告』第23集 2015

加藤隆志「市立博物館の歩み〈No.3〉～民俗分野の市民協働～」『相模原市立博物館研究報告』第27集 2019

相模原市総務局総務課市史編さん室『相模原市史 民俗編』2010

城山町『城山町史 4 資料編 民俗』1988

参考



A4 ちらし (表)



A4 ちらし (裏)

表1 「かご帳」リスト

商品名	絵図	注文者・地域	日付	カテゴリ	備考	頁
1 丸イモ			昭和23年	農耕		32
2 大玉二個		ひかり幼稚園(橋本)	昭和47年	運動会		1
3 不明		町屋	昭和47年5月			19
4 花竹		久保澤	昭和48年	祭	万燈	6
5 鈴割り玉	○	川尻小学校	昭和48年10月	運動会		8
6 こぼんがた			昭和48年8月	食生活	小判型ざる	1
7 うなぎびく	○		昭和48年8月	漁撈	うなぎ魚籠	4
8 アユノ籠	○		昭和48年8月	漁撈		33
9 アユノ籠	○		昭和49年5月	漁撈	鮎籠	2
10 小食籠	○		昭和49年8月			5
11 練習用玉入れざる	○		昭和49年8月	運動会		9
12 花竹			昭和49年8月	祭	万燈	6
13 鈴割りの玉	○	大野台小学校	昭和49年9月	運動会		10
14 だるま	○	川尻小学校	昭和49年9月	運動会		11
15 だるま			昭和49年9月	運動会		71
16 みがき のこじ魚籠	○		昭和49年12月	漁撈		12
17 (魚籠)	○		昭和50年7月	漁撈		13
18 (団扇)	○	浅川 原 福田 久保澤	昭和51年8月	祭	浅川 原 は八王子か	16
19 花竹	○	浅川 原 福田 久保澤	昭和51年8月	祭	浅川 原 は八王子か	16
20 大玉	○	川尻小学校	昭和50年9月	運動会		15
21 玉入れ籠	○	相模原市小学校	昭和51年9月	運動会		9
22 5月のぼりの玉	○		昭和52年3月			34
23 鈴割りの玉	○	久保沢	昭和52年4月	運動会		36
24 不明	○	橋本幼稚園	昭和52年5月			19
25 こぼんがた			昭和52年7月	食生活		21
26 花竹			昭和52年8月	祭	万燈	6
27 アユノ籠		久保澤 高橋	昭和52年8月	漁撈		21
28 だるま		相模原市立鶴園小学校	昭和52年8月	運動会		24
29 だるま	○		昭和52年8月	運動会		26
30 くりふるい	○		昭和52年8月	農耕	栗ふるい	28
31 そばあげ 三升あげ 一升あげ 五合あげ			昭和52年8月	食生活		38
32 (玉)	○	田名	昭和52年10月	運動会		30
33 鈴割りの玉		相模原市相武台中学校	昭和53年2月	運動会		39
34 こぼんがた		面原 井上	昭和53年5月	食生活	面原は向原か	20
35 こぼんがた アユノ籠	○	九澤良治	昭和53年7月	漁撈		35
36 みそこし		いなば	昭和53年10月	食生活		37
37 (アユノ籠)	○	面原 井上とし	昭和54年3月	漁撈		42
38 にわとりふせかご		中澤くみとや	昭和54年4月	養鶏	鶏伏せかご	40
39 アユノ籠	○	久保沢	昭和54年5月	漁撈		43
40 花竹		大島	昭和54年8月	祭		46
41 籠か	○	小山白ゆり幼稚園	昭和54年9月			48
42 鈴割りの玉	○		昭和54年9月	運動会		47
43 鈴割りの玉	○		昭和54年9月	運動会		52
44 だるま	○	若葉台広陵小学校	昭和54年9月	運動会		50
45 魚籠	○		昭和54年10月	漁撈		53
46 五升ざる			昭和55年8月	食生活		31
47 かまざる		寺田串田	昭和55年8月		寺田串田は人名?	54
48 桑入ざる		寺田串田	昭和55年8月	養蚕	寺田串田は人名?	54
49 くわつみ魚籠			昭和55年8月	養蚕	桑摘魚籠	32
50 丸イモ			昭和56年3月	農耕	イモかご?	55
51 不明		大島幼稚園	昭和56年3月			57
52 なみもの			昭和56年9月			56
53 (鈴割りの玉)	○	与瀬の学校	昭和56年9月	運動会		60
54 こいみ			昭和56年10月	農耕	肥箕?	56
55 こぼんがた		津久井町	昭和57年5月	食生活		62
56 花竹 竹ぼう(お飾り用)		青葉台自治会(ふる里祭り実行委員会)	昭和57年7月	祭		44
57 まんじゅうざる	○	津久井町	昭和57年8月	食生活		62
58 かはぞき	○	津久井町	昭和57年8月			64
59 たるみこし			昭和57年8月	祭	樽神輿の屋根 新聞記事あり	65
60 玉入れ籠	○	藤野町小学校	昭和57年9月	運動会		68
61 不明	○	津久井町小学校	昭和57年12月			63
62 大玉	○		昭和58年4月	祭		17
63 5月のぼりの玉	○		昭和59年4月			34
64 花竹 屋台の竹			昭和59年7月	祭		69
65 花竹		久保澤	昭和59年8月	祭		45
66 花竹		久保澤	昭和59年8月	祭		70
67 鈴割り玉	○	川尻小学校・中野小学校	昭和60年9月	運動会		72
68 大籠	○		昭和61年3月	農耕		75
69 だるま籠			昭和61年8月	運動会	「広陵小学校同じ寸法」とあり	73
70 玉入れ籠	○	広田小学校	昭和61年8月	運動会		73
71 花竹		大島	昭和61年8月	祭		73
72 大玉	○	中野小学校	昭和61年9月	運動会		74
73 玉入れ籠	○	青山	昭和62年9月	運動会		77
74 (だるま)	○	二本松	昭和63年	運動会		79
75 そばあげ				食生活	蕎麦あげざる	1

76	だるまの黄色の縁巻き	○		運動会		1
77	うなぎびく	○		漁撈	うなぎ魚籠	3
78	花竹		谷ヶ原	祭	万燈	6
79	丸イモ	○		農耕		14
80	(籠)		丸信商店			18
81	だるま			運動会		22
82	目指し				目籠?	32
83	草刈り					32
84	けつづち					32
85	大籠					32
86	肥筑のふちまき			農耕	修理?	32
87	そばあけ			食生活		32
88	桑入笥			養蚕		31
89	不明	○				67
90	そばあけ		若葉台	食生活		70
91	敷か	○	小松			76
92	鈴割り玉			運動会		78

表2 「ようこそ!竹細工ワールドへ!!〜久保沢最後の籠屋さん〜」展示資料目録

№	資料名称	点数	所有者
導入			
1	だるま(男)	1	
1. 暮らしの中の竹細工			
2	三つ組ザル	1	
(1) 生業			
3	桑摘みびく	1	
4	桑とりかご	1	
5	メカゴ	1	
6	桑くれざる	8	
7	エガ	1	
8	エガ台	1	
9	まゆ用びく	1	
10	糸車	1	
11	しよいかご	1	
12	落ち葉かご	1	
13	竹ぼうき	1	(宇佐美 竹細工道具)
14	熊手	1	
15	おけざる	1	
16	くるり棒	1	
17	穀箕	2	
18	ざる	2	
19	ふるい(とおし)	1	
(2) 日常生活			
20	ざる	3	
21	米とぎざる	1	
22	そばあけ	1	
23	うどんあげ	1	
24	しゃもじ立て	1	
25	しゃもじ	1	福の会
26	箸	1	福の会
27	うちわ	1	福の会
28	扇子	1	福の会
29	神酒の口	4	
(3) 珍しいもの			
30	患者かご	1	
2. 籠屋の仕事			
31	イモフリメカイ製作途中	6	
32	【写真】イモフリメカイ製作手順	10	
33	【動画】竹割	1	柳田竹細工店
34	【動画】竹編み	1	柳田竹細工店
3. 久保沢最後の籠屋 宇佐美幸治さんのこと			
(1) 久保沢と宇佐美さん			
35	【パネル】箱根原市における久保沢の位置	1	
36	【パネル】昭和初期の久保沢図	1	
37	【写真】旧自宇原で育ち編む宇佐美さん	1	宇佐美壽氏
38	【写真】旧仕事場で育ち編む宇佐美さん	1	宇佐美壽氏
39	記ざる	1	(宇佐美 竹細工道具)
40	ざる	1	(宇佐美 竹細工道具)
(2) 仕事道具と製品			
41	鈴掛け	1	(宇佐美 竹細工道具)
42	キャンバス地	1	(宇佐美 竹細工道具)
43	木ハンマー	2	(宇佐美 竹細工道具)
44	ナイフ	1	(宇佐美 竹細工道具)
45	台(竹細工)	1	(宇佐美 竹細工道具)
46	花切鉄	1	(宇佐美 竹細工道具)
47	へね(竹細工)	4	(宇佐美 竹細工道具)
48	ナタ(ケース付き)	1	(宇佐美 竹細工道具)
49	割りナタ	1	(宇佐美 竹細工道具)
50	削りナタ	1	(宇佐美 竹細工道具)
51	折りたたみノコ	1	(宇佐美 竹細工道具)
52	玄能	1	(宇佐美 竹細工道具)
53	ノミ	1	(宇佐美 竹細工道具)
54	カンナ	1	(宇佐美 竹細工道具)
55	つるかき籠	1	(宇佐美 竹細工道具)
56	携帯籠	1	(宇佐美 竹細工道具)

57	ニッパー	1	(宇佐美 竹細工道具)
58	ペンチ	1	(宇佐美 竹細工道具)
59	ドライバー	1	(宇佐美 竹細工道具)
60	目立てヤスリ	1	(宇佐美 竹細工道具)
61	ケン	1	(宇佐美 竹細工道具)
62	竹(蛇口)はさみ	7	(宇佐美 竹細工道具)
63	サンワタシ	6	(宇佐美 竹細工道具)
64	へら	4	(宇佐美 竹細工道具)
65	十字	1	(宇佐美 竹細工道具)
66	長さ見本(玉入れ用)	3	(宇佐美 竹細工道具)
67	物差し	10	(宇佐美 竹細工道具)
68	編み型見本	4	(宇佐美 竹細工道具)
69	キリ	1	(宇佐美 竹細工道具)
70	熊手製作道具	4	(宇佐美 竹細工道具)
71	熊手	1	
72	【パネル】旧仕事場間取り図	1	
73	【写真】白ゆり幼稚園園子供みこし	2	宇佐美壽氏
(3) かがねから			
74	かがね	1	(宇佐美 竹細工道具)
75	肥箕	1	(宇佐美 竹細工道具)
76	穀箕	1	(宇佐美 竹細工道具)
77	【写真】かがね アユノ籠	1	(宇佐美 竹細工道具)
78	鮎の籠	2	
79	『宏道挿花繪意』	1	(宇佐美 竹細工道具)
80	びく(花器)	1	(宇佐美 竹細工道具)
81	【写真】かがねまんじゅうざる	1	(宇佐美 竹細工道具)
82	まんじゅうざる	1	(宇佐美 竹細工道具)
83	まんじゅうざる(フタ)	1	(宇佐美 竹細工道具)
84	【写真】かがね そばあけ	1	(宇佐美 竹細工道具)
85	そばあけ	1	(宇佐美 竹細工道具)
86	【写真】かがね だるま	1	(宇佐美 竹細工道具)
87	だるま(女)	1	

参考 展示風景



写真 1
全景



写真 2
1章 暮らしの中の竹細工 (1) 生業



写真 3
3章 久保沢最後の籠屋 (2) 仕事道具と製品



写真 4
3章 久保沢最後の籠屋 (3) かご帳から